

みんなからかわらばん

第7号
発行 2015年11月23日
九州教区
東日本大震災対策小委員会



「つながる力」で

長期の取り組みを

福岡城東橋教会 鈴木恵さん

「砂場って、あつたかいんですね。」つぶやくように言われた一言が忘れられません。

2012年の夏、苫小牧市で実施された保養プログラムに、スタッフとして参加した時のことです。被災

地の子どもたち、特に未就学児の親子を対象にした保養プログラムで、20数名を約一週間お迎えするとう、市民による手作りの企画でした。

初日に、晴天の公園で遊ぶ時間がありました。幼い子どもたちに、久しぶりに砂遊びをさせてあげられて嬉しかったと、最終日に笑顔で話していたお母さんが、「砂場って、あつたかいんですね。忘れていました。」と言われたのです。少しの沈

黙の後、目に涙がいつぱいになり、「いつまで続くんでしょうか」と、それまでの笑顔では語られなかった苦労や不安を語って下さいました。放射能被爆から子どもを守りたい、でも事情があつて避難できないこと。外遊びはできず、遠くまで食材を車で買いに行く生活を続けながら、何もなかったように暮らそうとする人々の中で孤立し、孤独だったこと。不安や焦りの中でついイライラして、こどもに優しくできない自分を責めていたこと。ここでたくさん仲間に出会えてホッとしたこと。お話を聴きながら、ただ一緒に泣くことしかできない私は、無力

でした。

その出会いがきっかけとなり、被災地支援のためのバザーをしたり、放射能や原発について地区でこどもたちと学んだりするようになって

たのですが、正直に告白すると、その熱意は一時的なものでした。翌年にも同じ企画に部分的に参加しましたが、出産や転居など日常に追われる中で、いつの間にか自分のことで精一杯になってしまったのだと思います。

九州教区へ来て、初めてこの「みんなからかわらばん」を読んだ時、衝撃を受けました。記事は、保養プログラムで九州に招かれた後藤絆奈さんからのお礼のお手紙でした。そこには、2年前に出会った親子と同じ悩み、苦しみが語られていたのです。被災地の状況は変わっていない、むしろ深刻になっていることを知り

「できることは何か」と悶々としていた時、震災対策小委員会が保養プログラムを計画していることを聞き、支援献金のために手作りおもちゃの販売を企画しました。こどもの教会の保護者に呼びかけ、主旨に賛同してくれた14名と一緒に製作、教会バザーで販売することができました。小さな取り組みですが、被災地の現状に思いを寄せ、語り合うひと時も与えられ、新たな交わりが生まれたことを感謝しています。

小さなことを少しずつ続けたい。一人では難しいことも、教会・教会の交わりの中に希望があります。私たちの間にある「つながる力」を信じて、保養プログラムという長期に亘る取り組みを支えていきたいと思えます。



支援募金のお願い

◆この度、東北教区放射能問題支援対策室いずみと協力し、東北の親子約20名をお招きして短期保養プログラムを実施することとなりました。

日時：2016年3月28日(月)～4月1日(金) 場所：奄美

◆プログラム実施のための経費は概算で200万円以上と見込まれ、その一部を九州教区の支援募金から支出することになります。これまで同様、募金に是非ご協力いただきたく、お願いをいたします。

◆保養プログラムは、長期にわたって必要とされているプログラムです。九州教区内でも、息長く続けていきたいと願っています。どうぞ、続けてお祈りください。

